

あたたためて

〈家庭の同行23〉

引きだされる力



NPO 法人くたかけ会代表
和田重良
1948年小田原市生まれ
くたかけ生活舎での共同生活（人生科や農作業）をとおして、青少年や家庭の生活にさまざまなメッセージを送っている。

数字と人の不安

震災の後しばらく『くたかけ生活舎』でもひっきりなしの空襲警報のような警報が鳴って、灯火管制のような停電がしばらく続きました。放射能が撒き散らされて不安はますます世界中に襲いかかっています。

こんな時に頼りになるような気がするのが「数字」です。「今の地震は震度いくつです」なんて言われると何となく危険度が分かったような気がするし「マグニチュードいくつ」なんてことで一応判断できるような気がしてしまいます。

「停電は三時間です」と言われるとそれが長いかわいかは人それぞれの受けとりですが、なんとなく目安というか目標ができます。

原発事故が重症かどうかもすべて数字で「なんかベクレル」とか表現されて、分かったのか分からないのかわかりませんが、一応納得がいった気がしてしまいます。ごまかしもできるわけですからよく考えると、この文明の社会は数字が蔓延して

まして、結構幅をきかせています。勿論、この文明は数字の発明なくして発展はなかったのです。それは十分承知のうえで人間は数字で不安に追い込まれもするというをお話したいのです。

数字はどこまで頼れるか

採点競技のスポーツは時として判定でもめること

があります。体操やボクシングがそれです。もちろん判定基準がそれなりにはつきりと決められているのですが、サジ加減というのがあって「ウン？？」となってしまうことがあるわけです。表現されてくる数字の根拠というのがよくわからないからです。

おまけに評価するものにバラツキがあるので単純に数字に頼れないこともあります。

それなのに人の頭は数字で言われると全面的に信頼できると思ってしまうのです。だからこそ科学文明はここまで進歩発展して来れたのです。そして、それをもとにして「教育」も進歩発展させていけると思ったのです。ところがそこには大きな落とし穴がありました。

人間の頭は比較して認識する仕組みになっているようですから、確かに数字は役立ちます。大きい小さい、遠い近い、長い短い、早い遅いなどと子どもたちも結構正確に認識できるのは数字を使えばなおさらハッキリするのだと知っているからです。

ところが犬はそれができません。だからその分比較した価値観を持ってません。人間はどうしても小さいより大きいほうがいい、

軽いより重いほうがほしい、短いより長いほうが立派などと思いつまみ入ります。そこで大きな間違いをすることになります。

子どもに励みになる？

その最たるものが成績評価です。

子どもは生まれた時から標準体重とか身長とかを示されて、親たちはすべて数字を頼りに人を育てようとしています。

その延長上に学校の成績というものもあります。多くの経験から言うと、何百人かの子を預かってみて「人間の価値と学校の成績とは完全に別もの」だと確信しています。能力評価に限ってみても数字で評価されるものは何の役にも立っていません。それどころか逆に人生の邪魔になっていることさえあります。

子どもの励みになることは「数字を追う」ということにあるのではなく、心のうちにある「充足感」とか「充実感」というものです。

優秀と言われる子が学校時代の評価をいつまでもアテにしている実質が伴わないで人生に行き詰ったりする例はたくさん見てきました。

その反対に学校に落ちこぼれのレッテルを貼られた子が「あそび」も「まなび」も「はたらき」もそのこと自体に充実して満足していくと、あつという間に「その子らしさ」を取り戻していくのです。

テキストが活かされること

「およそ」とか「だいたい」とかの活かされていく元は勘というやつです。

昔、日本人は尺を当てなくても、どこが真ん中か、どのくらいの長さか、当てはまるのかはまらないのか、そういうものをちゃんと見抜く力がありました。

学食のおばちゃんが目方なんか量らなくても、ほとんどピツタリの分量のごはんを盛り付けているのにはビックリです。

数字でみなくても「これくらいかな」という所が活かされてくると、子どもたちの生活は安らいでイキイキしてきます。

キッチンとしてのもよいことですが、キッチンと数量に合わせて生きていくと伸びるものも伸びません。

いつも言いますが、勉強は「時間とページ数」ではなくてその中身なのです。人生も同じです。

自然の風景

かえる

じつと水草の上に構えたすがたも、虫を食って目をひとまわり回すところも、重く軽く大地を踏んで進む歩みも、とても我輩などには太刀打ちできないところではない。身を繰り出して一飛び、両手両足をスラツと思いい切り伸ばして水中に飛び込む呼吸にいたっては「水蛙一体」などと小さな表現では間に合わない。天地、蛙の他に何もものもない、満ち満ちた

さわやかさである。

しかし蛙さんの本当のすばらしさは一々の動作にあるのではない。それをなまじめるかれの肚に据えどころがみごとなのである。一生のすがた。如何に生き、如何に死ぬるかそれを貫く無私の蛙だましが尊いのである。

井田正



和田重正著「山あり、花咲きて 父母いませり」より